2024年12月1日 待降節第1主日礼拝メッセージ

「目を覚ましていなさい」　　水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 24章 36−44節

本日から、キリスト教の暦はアドベントに入りました。私たちの教会でも、ツリーやアドベントクランツなどを飾ってクリスマスの準備がされております。ただ、目に見える形での準備は着々と進んでいる一方で、私たちはクリスマスを本当の喜びのうちに迎えるために、目には見えない心の準備を進めていかなければいけないことを思うわけです。そして実は、その目には見えない心の準備というものこそが、一番大事なことでありながら、一番おろそかになりがちなことであったりするようにも思います。

この「アドベント」というのは、「接近する」という意味のラテン語で、「待降節」のことなんですけれども、その「待降節」とは文字通り「イエス・キリストがこの世にいらっしゃることを待ち望む季節」という意味です。その「イエス・キリストがこの世に来られる」とは 2 つ意味がありまして、一つは「神の言の受肉としてのイエスさまの誕生」ということです。つまり、ベツレヘムのクリスマスにおける幼子イエスの誕生ということです。ヨハネ福音書には「言は肉となって、私たちの間に宿られた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」（1：14）とあります。言は肉となって私たちの間に宿られた。旧約聖書の創世記には「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ』こうして、光があった」（1：1−3）とあります。神様がこの世界を創られた時に言われた「光あれ」を初めとする数々の祝福の言葉は、そのまま私たちに対する願い・思いでもあるように思います。私たちが子どもたちにつける名前、あるいは子どもたちにかける数々の言葉も、いずれも私たちの彼らに対する願いや、思いが込められているように、神様がこの世界に、特に私たち人間に対する「愛してるよ」とか、「みんなと仲良くしてね」「いのちを大事にしてね」といった数々の思いのこもった言葉が具体的な肉の形をとってこの世に送り出されたのが、イエス・キリストであったわけです。アドベントの目的であるキリストの来臨とは、「神様の人間に対する愛と祝福の象徴であるイエス・キリストの誕生」という意味が一つにはあるわけです。

そして「キリストの来臨」、救い主がこの世に来られるということのもう一つの意

味は、「復活のキリストの将来における再臨」というものです。つまり、イエスさまが十字架につけられる前に「私は、あなた方をみなしごにはしておかない。あなた方のところに戻って来る」（ヨハネ 14：18）と言われたように、復活のイエスがまた来られるということ、ガリラヤにて再会した弟子たちに「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28：20）と言いながら、昇天して行かれたイエス・キリストが、いつか再び私たちの元に来て下さるということです。ですから、アドベントには、その「キリストの再臨の日を待ち望む」という意味もあるわけです。

お気づきかと思いますけれども、キリスト教の教会暦にはそれぞれ典礼色という色が決められていまして、アドベントの色は主に紫となっています。先週までは緑でしたが、今週からクリスマスまでは紫となっているわけです。紫は「尊厳」「悔い改め」「待望」など、いくつか意味があって、アドベント以外にはレントの季節の色ともなっています。紫が悔い改めと待望を同時に意味しているということは、もちろんこの私たちも悔い改めと待望、つまりこれまでの数々の自らの罪を振り返り、悔い改めながらキリストがこの世に来てくださるのを待ち望む、という姿勢が求められているのです。

さて、それで今日の聖書ですが、今日の聖書は「目を覚ましていなさい」と題されたイエス様のお話であります。イエス・キリストがエルサレムに入場されてから、ファリサイ派や律法学者たちと様々な論争をし、その後、神殿の境内を出ていかれた後に、オリーブ山というところで座って弟子たちにこの世の最後、終末における裁きのことを話された、その時の話の一部です。イエス様ご自身、エルサレムにおける十字架という、ご自身の最後の運命が近づいている中で、この世の最後について語られた、その一連のお話の部分です。

この世の最終段階、私の名を名乗る者が大勢現れて「私がメシアだ」といって人々を惑わすだろう。また、戦争や戦争のうわさを聞くだろう。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。不法がはびこり、多くの人の愛が冷える。しかしあわてるな。耐え忍べ。そしてそんな苦難が続いた後、いよいよ人の子が天の雲に乗って現れ、ラッパの音と共に天使たちを遣わし、選ばれた人々を呼び集めるのだと。その日がいつになるのかは、誰も知らない。天使も知らないし自分も分からない。神だけがご存じであると。だから、その日、その時を知らない私たちは目を覚ましていないといけないと。旧約聖書の昔、ノアの箱舟のお話の時代、この世が神様の

怒りというか失望によって起こされる洪水になる前は、ノアが家族や動物たちと箱舟に入るその日まで、一般の人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりして、その日その日を楽しんでいたわけです。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらってしまうまで、誰も何も気がつかなかった。イエス様がこの世に来られる場合も、同じだと言われているんです。その時、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから、目を覚ましていなさいと。ここでは、直前にノアの洪水の話があるものですから、連れて行かれる方、さらわれる方が滅びの運命、残される方が救われるようなイメージを持ってしまいますが、実際のところはどうなんでしょうか。連れて行かれる方が、実は神様によって救われ、残された方が実は滅びの運命なのかもしれません。しかしそれはいくら考えても分かりませんし、分かることは、要するにその時が来てしまったら、私たちはそれぞれ運命が分かれてしまうということだけなんです。そしてその運命の分かれ道は、目を覚ましていたかどうかであって、目を覚ますことができていなければ、クリスチャンであろうがなかろうが区別なく滅んでしまうから気をつけておきなさい、ということなんでしょう。「いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」まるでイエスさまはご自分のことを泥棒のようにおっしゃっておりますが、まあそのように私たちも、いつこの世の終わりの日、裁きの日、イエス様の再臨の日がきても、落ち着いてお迎えできるように準備しておきたいと思います。

それでは、その準備とは具体的にどうしておけばよいのか。どうしたら私たちは目を覚まして準備していることになるのか。そういう疑問がもちろんわいてくるわけですが、そのことについて、ある牧師が言っていました。「目を覚ましていることは、見ていることである。何を見るのかというと、自らの生き方であり、今自分が生きているこの世の中である。この世の中は今どうなっているのか。イエスが語り、またその振る舞いで示した神の国の実現に向かっているのか。それともその逆の方向にあるのか。それをしっかりと見なければならない。また、目を覚ましていることは、イエスを見ることである。イエスがどのように生き、どのようにこの世と関わりを持たれたかを見ることである。イエスをしっかり見ていると、今何をなすべきかが見えてく

る。そして、この世の中も見えてくる」。

先日、非常に衝撃的なニュースを見ました。11 月 27 日朝、大阪府柏原市の近鉄大阪線の踏切で、人身事故がありました。私の職場のすぐそばでした。そう言えば朝から電車が止まっていて、同僚が足止めを食っておったんです。後から聞いたところ、13 歳の男子中学生だったんだそうです。警察が電車の運転士に話を聞いたところ、「男子中学生が遮断している踏切内に遮断機をくぐるように入って来て、線路内でうつぶせで寝ころんだのを確認し、急ブレーキをかけたが間に合わなかった」と話していたそうで、どうやら自死とみられるようです。男子中学生は当日の朝、学校に向かうために家を出ていたのですが、この踏切はいつもの通学路とは全然違う踏切だったのだそうです。

彼が何に苦しめられていたのかは分からないですけれども、毎日毎日どれだけ苦しかったことでしょうか。詳しいことはそれ以上伝え聞いていないのですが、ぱっと考えるのは、学校が苦しかったのかな、ということです。もしかしたら、家にも居場所がなくて苦しかったのか。それとも、大切な家族には心配をかけたくなくて、じっと黙って苦しみを抱え込んでいたのかもしれない。いろいろ想像してしまいます。「踏切にうつぶせになる勇気があるなら…」なんて言う人もおりますが、勇気があるなしではない。彼にはもうそれしか道がなかったんです、きっと……。本当に悲しくてやりきれない思いになります。今考えれば、「そんなにしんどいんだったら、学校なんか行かんでええからって」「居場所がないんだったらウチにおいで」って言ってあげたい。もう今から言っても仕方ないことなんですけど……。そこまで苦しみぬいて頑張った彼の魂は、必ず神様が「よくがんばった」って引き取って天国に連れて行って下さっていると私は信じます。

私たちが見ている身近な人々の中で、今悩み苦しんでいる人はいないか。喉が渇いている人はいないか。寒さに震えている人はいないか。人との関わり、条件抜きの愛やいたわりに飢えている人はいないか。イエスさまならどうされたであろうか。13 歳の彼の痛ましい死は、彼を見つけてあげられなかった・彼を守ってあげられなかった私たちの罪の結果でもある、とも言えるように思います。私たちはもうこれ以上同じ過ちを繰り返さないように、目を覚まして周りを見て、自分自身を見て、イエスさまを見ながら、イエスさまが私たちのもとに来てくださる日をお待ちしたいと思います。